

下肢装具の活用は、効果的な理学療法を展開する上で欠かすことができない。入院期間の短縮化や超早期リハの普及とともに、どのような時期に、どのような目的で、どのようなタイプの装具を用いるかがポイントとなる。当然理学療法士には、装具をいかに運動療法の中に取り込み、相乗効果を高め得るかが求められており、そのためには最新の装具の開発状況や適応方法などを常に把握することが大切である。

今回、新しい下肢装具の適応について取り上げ、装具の特徴とその効果的な活用方法を中心に企画した。

■片麻痺急性期における早期長下肢装具療法(異 香織論文)

脳卒中に対する急性期リハビリテーションの概念が普及し、急性期から積極的な理学療法を行い歩行を獲得し、早期に社会復帰をする例が多くなってきた。筆者は歩行獲得困難な片麻痺重症例も、長下肢装具を用いた早期起立・歩行練習が必要であると考えている。当院で行っている装具療法について解説した。

■油圧機構を足継手に用いた AFO と理学療法(溝部朋文, 他論文)

油圧機構を足継手に用いた AFO は、主に片麻痺者が歩行に用いるために開発された。油圧機構が健常者における足関節背屈筋群の役割を果たし、立脚初期に足関節が制動を受けながら底屈するという正常歩行に近い機能を有する AFO である。機能と構造を明らかにするとともに、本 AFO を用いた場合に得られる歩容・歩行練習のポイント・調整方法について触れる。

■失調症患者に対する装具と理学療法(福本和仁論文)

失調症に対する装具療法は、経験的に使用されることが多くまたその作用機序も明らかではない。そこで失調症のタイプ分類から、姿勢保持における不安定要素の運動学的分析を試み、装具適応のガイドラインを示した。またわれわれが開発した新しい軟性股関節装具(G-アシスト, スタビラックス)について紹介し、構造的特徴および効果や作用機序、特に股関節の前額面における安定性の重要性について述べた。

■ポリオ後症候群に対する下肢装具と理学療法(佐古めぐみ, 他論文)

ポリオ後症候群(post-polio syndrome)とは、ポリオ罹患後に数 10 年の症状安定期を経て、新たな疲労、筋萎縮、疼痛などの多彩な心身の症状が出現する病態である。本邦におけるポリオ罹患の歴史とポリオ後症候群の病態について概説し、それらの患者に対する下肢装具の処方、理学療法を行う際の注意点について述べる。

■膝・足関節のスポーツ傷害に対する装具と理学療法(中江徳彦, 他論文)

スポーツ傷害に対して装具は医療機関やスポーツ現場で幅広く使用されている。本稿では膝・足関節のスポーツ用装具の目的と効果について概説し、大腿部筋損傷、前十字靱帯損傷、内側側副靱帯損傷、足関節内反捻挫に対する装具の選択と理学療法について紹介した。装具による皮膚や筋への圧迫による疼痛緩解や心理的效果については期待されるが、関節の制動については定量的な評価が十分でなく、使用に当たっては注意を要する。今後は装着感や耐久性に優れ、生体工学的効果に基づいた装具の開発が必要である。